

# サリン攻撃の後で

オウム真理教と日本人

渡邊 学

WATANABE Manabu

はじめに

1995年3月20日、東京の地下鉄はサリンと呼ばれる神経ガスを使った一団の人々の攻撃の場と化した。サリンは第2次世界大戦の最中、ナチスドイツによって開発された化学兵器であり、極微量でも人を死に至らせることのできる恐ろしい物質である。ナチスは報復を恐れてそれを使用するには至らなかった。それは以前、10年以上前に使用されたことがある。皮肉なことに、それが歴史上使用されたのはいずれの場合にも兵士に対してではなかった。大量殺戮を目的として市民に対して用いられたのであった。最初はイラク国内の少数民族のクルド人に対してイラク軍が用いたのであった。その次が今回であり、それは日本の政府機関が集中している霞ヶ関に向かう地下鉄車内で発散されたのであった。12名が死亡し、5500名が被害を受けた。日本は同年の1月に大地震に見舞われて5000名以上が亡くなったが、神経ガス攻撃の衝撃は大地震の衝撃以上に大きかった。そして、何よりも衝撃が走ったのは、それがオウム真理教という新宗教集団によってなされたことがわかったときである。

その宗教集団の代表がその罪を認めていないにも関わらず、その攻撃に参加したほとんどのメンバーは裁判で罪を告白している。オウム真理教はなぜ無関係な人々を攻撃したのか。彼らはなぜそのようなテロ行為を正当化できたのか。これらの疑問が提起されている。

いまや、オウム真理教教祖の麻原彰晃は、少なくとも26名が死亡し5000名以上が傷害を受けた17件の犯罪を首謀したという告発を受けている。麻原自身、1996年4月24日に東京地方裁判所で行なわれた第一回公判においてこれらの罪を否定せず、オウム真理教

を特徴づける信仰を反復するのにその機会を利用しただけであった。<sup>2</sup> この戦略は被害者を失望させただけでなく、教祖の無実を信じた信者たちも失望させた。

オウム真理教が引き起こした一連の事件は日本の歴史においてユニークであり、忘れがたいものとなった。それらは日本人の心に深刻な被害を与え、いまだに答えられていない多くの疑問を提起した。麻原彰晃のような日本人がなぜ同じ日本人に対してあれほど残虐でありえたのか。宗教集団がどうしてあれほどまでに破壊的でありえたのか。オウム真理教において救済とは何なのか。オウム真理教は宗教なのか。もしも宗教であるとすれば、われわれは通常の意味での宗教の概念を保持できるのか。オウム真理教は本当の宗教なのか、それともいわゆる破壊的カルトなのか。

私はオウム真理教の攻撃の隠された原理とそれがもつ含みについて検討したいと思う。

### オウム真理教の形成

オウム真理教は1987年に麻原彰晃によって創立された新しい宗教集団である。その前身となるオウム神仙の会は1984年に創立されている。その教義は初期仏教、大乘仏教、チベット仏教、ヨーガ哲学などの混淆である。1995年のはじめには日本に10,000名の信者、ロシアに20,000名の信者がいたとされる。また、日本には約1,000名の出家信者がいた。他の新宗教集団に比較すれば、その規模は比較的小さいが、出家信者が存在する点の特異である。オウム真理教自身の統計によれば、1995年の段階で出家信者の平均年齢は30.1歳であり、その若さが目立っている。<sup>3</sup> 最近の統計資料は存在しないが、警察による家宅捜索が行なわれさまざまな犯罪行為が露見

した後に信者数が激減したことは想像に難くない。

オウム真理教は「旧新宗教」と対立する「新新宗教」もしくは「(霊術)系の新宗教」に分類されている。<sup>4</sup> それはなかでもっとも新しいものの一つである。

オウム真理教の教祖は麻原彰晃であるが、本名は松本智津夫である。松本は1955年3月2日、熊本県に貧しい畳職人の息子として生まれた。完全に盲目というわけではなかったが、公立の寄宿制の盲学校に入れられた。完全に盲目の同級生と比べて、彼には弱視ながら片目に多少の視力があつたため、学校では特権階級であつた。彼がこの特権を利用して同級生を支配しようとしたという報告がなされている。<sup>5</sup> 彼は学級委員に選ばれようとして同級生を買収する試みが失敗したとき、彼は組主任の教師が邪魔をしたと非難した。そして、彼には周囲の人間を支配しようとする強い傾向があつたと言われている。

1975年に盲学校の専攻科を卒業してから九州地方でマッサージ師兼鍼灸師と働いていたが、1977年には東京に転居した。その間、1976年には熊本県八代市において傷害罪で15000円の罰金に処されているが、その詳細についてはよくわかっていない。

1977年に彼は東京大学をめざして予備校に入った。彼自身は総理大臣になりたかつたと主張している。しかしながら、受験に失敗し鍼灸師の仕事が続けた。1978年には石井知子と結婚し一児をもうけた。この時期に東洋医学の薬局を開いている。1982年には偽薬を作り高額で販売して20万円の罰金刑を受けた。そのことによって営業に大きな支障を来した。

1981年ごろ、彼は阿含宗という密教系の

新新宗教の信者となり、3年間その修行を続けた。後年、彼はこの経験はかなり否定的に評価して、それが煩惱や落ち着きのなさを増長させただけであったと述べている。<sup>6</sup>

阿含宗は桐山靖雄(1921-)によって創立された。桐山は今日密教を大衆化したという点で際立った人物である。彼は自らの身体の秘密のエネルギー源であるクンダリーニの覚醒を体験して「即身成仏」し、意志の力で着火することができることを主張した。阿含宗は、悪いカルマから解放する千座行という解脱の修行を強調するとともに、クンダリーニ・ヨーガによってチャクラを覚醒して超人になることに力点を置いた。

桐山はヨーガの実践だけでなく大脳生理学や深層心理学のような現代科学から借用した観念をも密教と結びつけた。また、彼の密教概念は人間の潜在能力開発運動とも結びついている。彼は、たくみに70年代のオカルティズムと超能力の国際的ブームを利用して当時の多くの若者に影響を与えた。松本智津夫は確かにこれらの若者の一人だったのである。

われわれは阿含宗の松本に対する影響を否定することはできない。松本は超能力を追求するとともに『ヨーガ経典』と仏教を結びつけた。しかしながら、松本は桐山よりもヨーガの教理を真剣に受け止めていた。その結果、彼はヨーガの主神であるヒンドゥー教の神、シヴァを本尊とすることになった。これは当然、仏教徒としてはかなり異様なことである。彼はまた、ヨーガ哲学を仏教の教えと混淆させ、人間の墮落という興味深い厭世的で終末論的な哲学を作り上げた。今日、あらゆる人間存在は来世で地獄か餓鬼か畜生に生まれ変わる運命にある。松本の救済力なくしては今日誰

も救われることはできない。このことはつまり、松本の干渉がなければ現代人の日常生活は無意味であることを意味する。このような厭世的な教えがオウム真理教によって引き起こされた真の悲劇を引き起こしたのであった。

また、松本は桐山のカルマとそれからの解放の観念を受け継いだ。しかし、それを彼のチベット密教理解に基づいて「カルマ落とし」の概念へと結実させた。彼はチベット密教をタントラ・ヴァジュラヤーナと呼び、自らの密教の基盤とした。松本の理解によれば、ある者のカルマは現象界に現われる。例えば、ある者が他者に虐待されれば、他者から虐待されるというその者の悪い「カルマが落ちた」ことを意味する。このようなカルマ理解は、オウム真理教の出家信者集団の内部で上位の者が下位の者を虐待するのに都合のよい理論的根拠を与え、さらにはそれが一般社会にも及ぼされる「救済行為」の名を借りた虐殺やテロリズムにつながっていったのであった。

松本がチベット仏教を選んだ理由はオウム真理教が阿含宗と似ていながら異なっていることを強調するという目的があったと考えられる。他方で、阿含宗は日本の真言密教に基礎を置き、初期仏教の仏陀直伝とされる経典を強調したのであった。

松本智津夫は著作活動や布教活動のために1980年代のはじめから麻原彰晃と名乗るようになった。麻原は1981年にはクンダリーニの覚醒を経験したと主張した。興味深いのはそれがヨーガの修行によるものではなく、仙道における小周天や大周天の修行によるものであったということである。<sup>7</sup>そして、彼は渋谷にヨーガ教室を開き、株式会社オウムを設立した。これは1987年のオウム真理教の宗教法人認可に先立ち、教団の設立以降も麻原彰

晃の本や教団の本を出版することを主な業務としていた。

1984年、麻原はオウム神仙の会を創立した。これが後年、オウム真理教と改称することになった。この段階で彼が主に強調したのは、解脱と悟りの二点であった。<sup>8</sup>

しかしながら、1985年に彼は「空中浮揚」を体験し、また、シヴァ神が現われて、戦いの中心となるべく運命づけられたアビケラツノミコに任命されたという。超能力を獲得した人々からなる理想社会であるシャンバラ王国を築くことが彼の使命であった。シヴァ神の啓示によれば、シャンバラは2100年から2200年の間に建国されるはずであった。<sup>9</sup>

麻原は当初からマスコミとのつながりを求め、オカルト雑誌に「空中浮揚」の記事を売り込むことに成功した。そのことは多くの関心を集めることに役立った。その結果、ヨーガの実修によって超能力を獲得しようとする多くの弟子が集まった。

1986年に麻原は自らが解脱したと主張した。同年と翌年、彼は3冊の著作を矢継ぎ早に出版した。『超能力 秘密の開発法』（1986）、『生死を超える』（1986）、『超能力秘密のカリキュラム』（1987）がそれである。<sup>10</sup> これらの著作において麻原はヨーガの修行によって超能力を養い健康を獲得することを強調した。宗教観念への言及が多少認められるとはいえ、宗教の教祖としてよりもヨーガのインストラクターとしての印象の方が強い。彼はときとして非道徳的な色彩をみせ、「幽体離脱」体験を獲得するために頻繁な性交渉をもつ手段として異性を利用したり、頻繁な自慰行為をしたりすることを奨励している。<sup>11</sup> 言い換えれば、彼の主な目的は超能力そのものをいかに獲得するかということにあり、宗教的であるとか高

い霊性を獲得するといったことにはなかったのである。

しかしながら、麻原は1987年7月に『マハーヤーナ』という月刊誌を発刊しはじめてから宗教的指導者として自らを打ち出すようになりオウム真理教を創立した。彼は救済の柱として(1)人々を病苦から解放すること、(2)この世の幸福をもたらすこと、(3)人々を解脱と悟りに導くことの三つを挙げた。<sup>12</sup> 彼はこの段階では自らの視野を広げて、すべての衆生の救済をめざす大乘仏教に近づけたと言えよう。

他方で、彼がすでにこの時期に弟子たちにチベット仏教でもっとも危険な思想を教えはじめていたことが裁判の過程でわかったのは大きな驚きであった。後年彼はこれをタントラ・ヴァジュラヤーナもしくは単にヴァジュラヤーナやタントラヤーナと呼んだ。<sup>13</sup> 1996年4月24日に行なわれた東京地方裁判所第一回公判における検察側冒頭陳述は以下のことを指摘している。

被告人は、昭和62年1月4日に行なわれた丹沢集中セミナーにおける教団の信者らに対する説法において、「チベット密教というのはねえ、非常に荒っぽい宗教で、例えばミラレパが教えを乞うた先生の一人にね、『おまえはあの盗賊を殺してこい』と、やっぱり殺しているからね。そして、このミラレパは、その功德によって修行を進めているんだよ。私も過去世において、グルの命令によって人を殺しているからね。グルがそれを殺せというときは、例えば相手はもう死ぬ時期にきている。そして、弟子に殺させることによって、その相手を『ポア』させるというね、一番いい時期に殺させるわけだね」などと述べ、その後も、教団の信者らに対する説法において、「ヴァジュラヤーナの教え」と称し、「結果のためには手段を選ぶ必要がない。例えば、ここに悪行

を積み、寿命が尽きるころには地獄に落ちるほどの悪行を積んで死んでしまうと思われる人がいたとして、成就者が生命を断たせた方がいいんだと考えて『ポア』させたという事実は、人間界の客観的な見方からすれば単なる殺人であるが、ヴァジュラヤーナの考え方が背後にあるならば、これは立派な『ポア』であり、知恵ある人が見たら、殺された人、殺した人、ともに利益を得たと見る」などと述べ、教義を実践するために被告人が必要と認めれば、人を殺害することも正当な行為であると説き、これを「ポア」と称していた。

かかる被告人の特殊な教義による殺人行為を容認する対象は、当初は、専ら教団に敵対するものに向けられていたが、その後、そのような者ばかりでなく、「真理を妨害することによって得たお金で養われていることも悪業だ」として敵対する者の家族にも向けられ、さらに、平成2年4月ころからは、現代人は、すべて悪業を積み重ねているのだから、これを被告人が「ポア」することにより魂を救うことができるとして一般人もその対象に組み入れられ、一般人に対する無差別大量殺人も容認するようになった。<sup>14</sup>

ポアないしポワ ('pho ba) はチベット仏教の用語で「意識の転移」を意味する。力のあるラマは人間や動物の魂を高次の領域や浄土に送り入れることができると主張された。<sup>15</sup> 『チベットの死者の書』はポワの方法のこのような記述の一例である。<sup>16</sup>

麻原はポワの概念をグルの命令のもとで行なわれる殺人の意味に変え、その際、殺害者にとっても殺害された者にとっても同時に利益のある行為であると主張した。殺人行為そのものが殺された者の魂の救済として理解された。つまり、麻原は自らが必要と感じたときに誰が死ぬべきかを決定する絶対の権利を持ってい

ると考えられていたのである。

1987年にオウム真理教の社会活動は強化され、大阪、名古屋、福岡だけでなくニューヨークにも支部が開かれた。

同年、麻原は『イニシエーション』と呼ばれる一連の講義を行なった。<sup>17</sup> これらの講義にはグノーシス的な転落の理解を通じて仏教とヨーガ哲学の奇妙かつ独特な混淆がみられる。麻原はヒンドゥー教の三主神の一柱であるシヴァを本尊とし、真我やプルシャの存在を講じたにも関わらず、自らが真の仏教徒であると主張した。

麻原によれば、最初、真我は「マハーヤーナ」(後にマハーニルヴァーナと言い換えられる)における絶対自由、絶対幸福、絶対歓喜を享受していた。しかしながら、真我は全宇宙を構成する根本エネルギーである三つのグナ(一般に三徳と訳されるが麻原は仏教の三毒と混同しているようにみえる)の干渉を受けて、明晰な展望を失ってしまう。これが無知である。真我は「コーザル世界」に転落して、身口意の能力を満喫する。次に、真我は印象の「アストラル世界」に降下する。そこでこれらの印象に執着してさまざまなカルマを積み重ね、生まれ変わる。このことは苦しみとなって現われる。<sup>18</sup> このようにして、麻原は『ヨーガ経典』や神智学的な知識を通じて腐敗や転落の過程として十二因縁説を解釈する。麻原の提示の仕方は宇宙論の体裁を取っているが、プルシャはここでは個体化の原理となっているように思われる。周知のように、コーザル世界やアストラル世界といった表現は仏教にはないし、無我説を主張する仏教にとって真我の主張はもちろん異質なものである。

麻原は後年著書のなかでハルマゲドンの到来を強調しているが、『イニシエーション』の

なかでは核戦争が近い将来勃発することがすでに指摘されている。彼の主張では、核戦争が回避されるかされないかは、オウム真理教の発展如何にかかっている。<sup>11</sup>

1988年に麻原は『マハーヤーナ・スートラ』を出版した。<sup>20</sup> その副題「大乘ヨーガ経典」が示しているように、それは明らかに大乘仏教とヨーガ哲学の混淆である。本書には現代社会に対する極めて否定的で厭世的な見解が見出される。

現代の人間は、まあ大体地獄か、餓鬼か、動物かに生まれ変わるとお考えになっても間違いないんじゃないでしょうか。それはなぜかという、まず殺生をしますね。盗みもします。邪淫もしますし、嘘もつく。酒は飲むと。これはもう救済の方法がないんじゃないかと考えた方がいいですね。<sup>21</sup>

彼は現代人よりも犬や猫のようなペットの方が現代人よりも高い生れ変わりをする可能性さえ示唆している。なぜなら、これらのペットは今や殺したり盗んだりする必要がないからである。これは明らかに聴衆に対する脅し文句となっている。つまり、麻原彰晃とオウム真理教以外に救われる道はありえないことを示唆しているからである。

麻原は日本をシャンバラに変える計画を提案した。シャンバラとは、いうならばシヴァの化身たる麻原彰晃が政教一致の原則に基づいて統治する国家である。彼はこの計画をロータス・ヴィレッジ構想とも呼んだ。<sup>22</sup> 麻原は、「この計画によって、闘争のない平和な世界、人が人を裏切らない平和な空間、本当の意味での愛に溢れた静かな空間が訪れるだろう」と予言している。<sup>23</sup>

しかしながら、オウム信者以外にだれも存在しないときにのみこのような計画が可能にな

ることが明らかになる。なぜなら、一般の人々にとってオウム真理教は攻撃的な迷惑な存在以外の何ものでもなかったからである。<sup>24</sup>

他方で、オウム信者は、自分たちが至高の真理を抱いているがゆえに抑圧されたり迫害されたりしていると考えていた。ここには二つの集団の間の皮肉な対照がみられる。一方には、他の人々を救済しなければならぬと感じているオウム信者がおり、他方には、オウム真理教が若者にとって危険で有害であり、オウム真理教に救済されたいとは思ってもみない一般の人々がいるのである。オウム信者の観点からすれば、信者でない人々、とりわけ、反オウムを掲げて活動している人々は至高の真理に反対しているのであり、来世で地獄に行くに値する。麻原のタントラ・ヴァジュラヤーナの教義を考慮するならば、「解脱者」がこれらの反オウムの人々を殺害した方が、殺害される人々自身のためにも殺害者自身が徳を積むためにも好ましいという結論に達するのは容易なことである。

## オウム真理教をめぐるトラブル

1989年はオウム真理教にとって決定的な年であった。この年、教団にとって決定的な転換点があつた。まず第一に、麻原は『滅亡の日』という最初の終末論的で厭世的な著書を出版した。<sup>25</sup> それは、麻原を通じてなされたヒンドゥー教の神シヴァの啓示に照らしてみた、キリスト教の新約聖書のヨハネ黙示録の注解である。この段階では世の終わりは21世紀のはじめと予言されていた。麻原はさらに、『滅亡から虚空へ』(1989)、『人類滅亡の真実』(1991)、『ノストラダムス秘密の大予言』(1991)、『麻原彰晃、戦慄の予言』(1993)、『麻原彰晃、戦慄の予言』第二弾

(1993)などといった世の終わりに関する著書  
を出版していった。<sup>26</sup> 彼のハルマゲドンの到  
来、世の終わりの世界大戦の予言はますます  
強化されていった。

第二に、田口修治という出家信者がオウ  
ム真理教の教理を疑問視して信者を辞めよう  
としたが、オウム信者が行なった私刑によつて  
2月に殺害された。<sup>27</sup> これはオウム真理教に  
とつて決定的な一歩であつたとされる。なぜな  
ら、これをもつて麻原がポアという用語を制裁  
としての殺人に適用しはじめたと考えられてい  
るからである。

第三に、麻原はかなり露骨に殺人を正当  
化する教義を弟子たちに教えはじめた。おそ  
らくこれには田口修治事件が直接影響してい  
ると考えられる。つまり、実行犯であつた信者  
の動揺を抑えるために田口の「ポア」を正当化  
する必要があつたのである。

第四に、麻原は真理党と称する政治団体  
を組織した。おそらく、彼はオウム真理教が自  
らの政治的野心を満足させるのに有用であると  
考えたのであろう。

第五に、オウム真理教は8月に東京都から  
宗教団体としての認可を受けたが、それには  
困難が伴わなかつたわけではなかつた。これ  
以降、オウム真理教の被害者が圧力団体を  
形成したからである。彼らは自らの子どもが連  
絡を絶つて出家信者となつた親からなつてい  
た。

第六に、麻原と弟子たちはTBSが「オウム  
真理教被害者の会」会長やその顧問弁護士の  
インタビューが放映される計画を知つて動  
揺した。その結果、彼らは顧問弁護士の一家  
を2歳児の子どもを含めて殺害するに至つた  
のであつた。この事実は逮捕されたオウム信  
者の供述によつて昨年9月になつてはじめて

明らかになつた事実である。

この段階で、麻原や信者たちは、自分たち  
の存在にとつて脅威となる人物を殺害するた  
めの実質的な正当化の理由を必要としたよう  
に思われる。このため、麻原は弟子たちに対  
してさらに公然とタントラ・ヴァジュラヤーナに  
ついて教えはじめた。むろん、これはオウム信  
者だけに対して公開されたのであつて一般に  
対しては文書としては公開されなかつた。<sup>28</sup> も  
しある人間が悪いカルマを積み重ねているな  
らば、つまり至高の真理と関係がないならば、  
その者の生命を「トランスフォーム」した方がよ  
い、つまり殺した方がよいと、麻原は明確に主  
張している。麻原によれば、そのような個人を  
殺すことはオウムの信者側の愛とさえみなされ  
る。<sup>29</sup> 彼はこの種の殺人を「ポア」と呼んでい  
る。そして、彼はオウム真理教に反対する人々  
や団体を破壊するように信者に命じ、各オウム  
信者が一所懸命に努力するならば、日本その  
ものがオウム真理教になる、つまり、「仏陀の  
国」になる日も遠くないと述べた。<sup>30</sup> それから、  
第一回公判の検察側冒頭陳述にも一部引用  
されていたものだが、麻原は以下の引用にみ  
られるように、タントラの菩薩にとつて他者を裨  
益するために自らが悪いカルマを積み重ねる  
ことが最高の課題であることを強く示唆した。<sup>31</sup>

…Aさんには慢が生じてきて、この後、悪  
業を積み、そして寿命が尽きるころには、地獄  
に落ちるほどの悪業を積んでしまつたらうと。  
…このAさんを、ここに成就者がいたとして、  
殺したと。…ここで例えば、生命を絶たせた方  
がいいんだと考え、ポアさせたと。…客観的に  
見るならば、これは殺生です。客観というのは  
人間的な客観的な見方をするならば。…しか  
し、ヴァジュラヤーナの考え方が背景にあるな  
らば、これは立派なポアです。…智慧ある人  
がこの現象を見るならば、この殺された人、殺

した人、共に利益を得たと見ます。<sup>32</sup>

オウム真理教が宗教法人として認可されてから、それに対する強い批判が巻き起こった。秋になって『サンデー毎日』という週刊誌が「オウム真理教の狂気」と題する一連の記事を掲載した。オウム真理教によって連れ去られた——出家信者となった——子どもたちの親が集まって開いた座談会が掲載された。親たちは、親子の間に深刻な対立も葛藤もなかったのに子どもが親を捨てて、オウム真理教が子どもたちに会わせたり接触を持ったりさせないのは不当であることを訴えた。<sup>33</sup>

1986年からオウム真理教は出家（シツシヤ、サマナなどと呼ばれた）と在家という二重の会員制度を設けた。出家会員となることは持てるものをすべてオウム真理教に布施するだけでなく、自らが相続するはずの遺産をも両親に請求して教団に布施しなければならないことを意味した。容易に想像が付くように、このことは出家信者がとりわけ未成年者の場合に大きなトラブルを引き起こした。家族のなかで誰かが病気の場合にはオウム信者はその者をオウム真理教付属病院に連れていった。そこでその病人はすべての持ち物や遺産をオウム真理教に対して放棄するまで脅かされることになった。一説によると、数床しかベッドをもたないその小さな医院では5年間に21名の死亡が報告されているという。<sup>34</sup>

オウム真理教がこのような出家制度を採用してから出家後に出家信者の居所を同定することは至難の業となった。現在でも死んだか行方不明となっている出家信者が現在でも56名に上るといふ。<sup>35</sup>

1989年には大きな悲劇が起こった。オウム信者が「血のイニシエーション」を受けるために100万円支払わなければならないことがわ

かって、坂本堤弁護士は血のイニシエーションと関わる虚偽の広告と詐欺の罪でオウム真理教を告訴する決意をした。宗教法人の認可を受けたばかりのオウム真理教にとってそれは大きな脅威であった。麻原は弟子に命令して、「オウム真理教被害者の会」顧問弁護士の坂本堤氏とその妻子を排除するように命令した。彼らはみな、1989年11月4日の未明に殺害された。彼らの行方不明が明らかになってから麻原は渡航先のドイツのボンで記者会見を開くことになったが、その際、それが身内の犯行ではないかと思われるというきわめて不愉快なコメントを行なっている。しかし、彼は明らかに坂本一家が「真理」にもとり死なないしボアに価すると考えていたのであった。

田口修治や坂本一家の殺害のような出来事にも関わらず、麻原は国会議員に選出されるという政治的な野心を捨てなかった。1990年2月に麻原と24名の弟子が衆議院選挙に立候補した。その結果は麻原とオウム真理教にとって惨憺たるありさまで完璧な敗北と屈辱であり、彼らの得票総数はほんの1783票にすぎなかった。<sup>36</sup>あまりにも得票数が少なかったため、オウム真理教は各候補者のために拠出した供託金をすべて没収されることになった。さらに、選挙運動のために駆り出した多くの出家信者がオウム真理教の施設から逃走する結果にもなった。これは教団にとって由由しき事態であった。

麻原は当初、オウム真理教の解散をも口にしたとされるが、うって代わってこの段階で信者に対する締め付けを強化する方針を取った。オウム真理教の公式見解は、このたびの選挙の敗北は麻原彰晃の面目を丸潰しにしてオウム真理教を完璧に打ち砕こうとする陰謀の結果であったというのである。<sup>37</sup>



麻原は選挙が終わってまもなく、オースティン彗星が地球に壊滅的な打撃を与え、近い将来破局が訪れると在家信者に対して予言をした。彼らは行方も知らされず石垣島に集められ、持てるものをすべて布施して直ちに出家するように促された。出家信者の増加はそのまま教団の収入の増加につながるが、実際に多くの在家信者が出家する決断をしたため、教団は経済危機から救われたようである。<sup>38</sup>

それから、麻原はヴァジュラヤーナがまた「武力を使つての破壊」を意味すること、さらに、オウム信者たちがヴァジュラヤーナの精神的修行によって救えない魂の世界を破壊しなければならないことを明らかにした。<sup>39</sup> そして、麻原は以下のことさえ示唆した。

…いつこの肉体を供養するかと。例えば国家的な弾圧が真理に対して向けられると。そのときに自己の肉体が投げ出せるかと。例えば真理を弾圧する国家にとって、真理というものは当然邪法だろうから悪人呼ばわりされるだろう。その上に身体が傷つき、あるいは生命を捨てなきゃならないかもしれないと。それに対して平気で捨てると。これが身体を供養するタントラの道と。…その心の成熟のために自己を捨てる道、これがタントラだ。<sup>40</sup>

この時期から人間を死に至らしめる病原菌の研究や培養が山梨県上九一色村のオウム真理教施設ではじめられたといわれている。また、1990年にはオウムは熊本県波野村の施設で毒ガスの開発製造をしようとしたという。同所ではとりわけ地域住民のオウム真理教の進出に対する反対がきわめて強かった。結局、波野村とオウム真理教は合意に達し、オウム真理教が村から退去する代わりに村が9億2千万円もの保証金を支払うことになった。この額は村の年間予算の半額にも及んだのであ

った。<sup>41</sup>

1991年にはオウム真理教は長野県松本市に影響を及ぼしはじめた。翌年、教団はそこに支部を建設しようとしたが、地域住民の反対があったためその規模を原案の三分の一に縮小しなければならなかった。

この段階で、麻原は頻繁に予言をするようになり、ハルマゲドンについても言葉を費やした。井上嘉浩は麻原の直弟子の一人であったが、逮捕されてからオウム真理教にとって麻原の予言は単なる予想や予言ではなく、弟子たちによって実現されなければならないことであったことを明らかにした。<sup>42</sup> したがって、麻原の予言をくわしく検討する必要があると言えよう。

1992年9月19日に麻原は今生における「カルマの現象化」(報い)について語り、『サンデー毎日』の編集長の例を挙げて、オウム真理教を批判したものがその結果病に苦しむということを指摘した。<sup>43</sup> 後年、麻原は弟子に攻撃者を排除するように命令することによって彼に反抗したり反対したりする者に対して報復した。例えば、ジャーナリストの江川紹子、オウム真理教被害対策弁護団の滝本太郎弁護士、「オウム真理教被害者の会」会長の永岡弘行らを抹殺しようと試みたことが明らかになっている。

1993年には麻原は弟子たちに秘密裏に命じて、ロシアのAK74のデザインを模範とした機関銃を千丁制作し化学兵器を研究開発するように命じた。同時に、彼は、来たるべき第三次世界大戦の目的が主要都市を破壊して無政府状態をもたらすことであることを弟子たちに説法した。

1993年にはオウム真理教はサリンという神経ガスの生産に成功した。1994年のはじめに

は30kgものサリンを生産したといわれている。麻原は限られた人数の信者を中国に連れていき、そこで以下のようなヴィジョンを見たと言った。そのヴィジョンによれば、自分が王となって1997年に日本を支配し、1997年は真理元年と呼ばれるようになり、真理に反対するすべての人々を殺さなければならないというのである。<sup>44</sup> 同年、オウム真理教は他の神経ガスや爆薬の生産にも成功した。

1994年6月27日に長野県松本市でいわゆる松本サリン事件が起こった。7名が死亡し144名が傷害を受けた。オウム真理教はサリンガスを発散するために特別な自動車を開発して、同教団の松本支部の建物をめぐる裁判を担当していた裁判官を殺そうとしたのであった。裁判官は誰も死ななかつたが、裁判が事実上無期延期となったのはオウム真理教の立場からすれば成功であった。<sup>45</sup>

初期の段階から、松本サリン事件は第一通報者だけが被疑者となり、それ以上捜査の網が広がらなかった。しかしながら、1995年1月1日付の読売新聞紙上に、上九一色村にあるオウム真理教の施設の一つである第七サティアンの地面の土からサリンガスの残留物が検出されたことを示す記事が掲載された。オウム真理教の指導者たちはその記事に動揺した。そこで、彼らはオウム真理教の信者自体が神経ガスによる攻撃の被害者であると主張して、地域住民に対して虚偽の告訴をしたのであった。

2月28日になり、仮谷清志氏が誘拐された。彼は資産家の妹がオウム真理教を離れるように説得しようとし、教団から妹をかくまったのであった。仮谷氏はオウム真理教施設に連れて行かれ、妹の居場所を自供させる目的で投与された多量の自白剤のために、死亡するに至

った。警察の捜査の手がはじめて教団としてのオウム真理教にまで延びることになり、オウム信者がまもなく被疑者となった。

3月初旬、オウム真理教は、阪神大震災に続く災厄が日本を見舞うことを予言した麻原の新著『日出ずる国に災い近し』の広告を配布した。また、他の文書は日本でまさに戦争が始まったこと、そして、恐ろしい状況が日本を見舞う運命にあることを予告していた。<sup>46</sup> これはオウム真理教によってまきになされようとしていたことの予告であった。

麻原は、警察がオウム施設の家宅捜索を知ったとき、東京の地下鉄をサリンガスによって攻撃して警察の捜査を攪乱する決断をした。言い換えれば、サリンによる攻撃は警察を混乱させるための方便だったのである。

3月20日午前8時すぎに東京の地下鉄のいくつかの車両のなかでサリンが発散された。12名が死亡し3796名が負傷した。<sup>47</sup> これは史上稀に見るテロリズムであり、他に比べようのない大惨事であった。

攻撃に参加したオウム信者がオウムの施設に戻ってきたとき、麻原は以下のように述べたと報告されている。

これはポアだからな。分かるな。瞑想しなさい。そして、「グルとシヴァ大神とすべての真理勝者方の祝福によってよかったね」という詞章を1万回唱えなさい。<sup>48</sup>

このことは、警察の捜査の攪乱を狙っただけであるのに、麻原が無実の人々をサリンで攻撃した弟子たちの行動を正当化するためにポアという言葉を使用したことを示している。

二日後、警察は数千人の警察官を動員して全国のオウム真理教の施設に対して一斉に家宅捜索した。警察は名目上仮谷清志氏の捜索のためと発表していたが、ガスマスクやカ

ナリヤを携帯していたため、教団によるサリン攻撃を予測していたかのようであった。

この日からマスコミはオウム真理教について毎日膨大な時間を費やして半年あまりも報道を続けたのであった。テレビ、ラジオ、新聞、週刊誌、単行本など、オウム真理教に関する報道が洪水のように溢れかえっていった。

3月23日、麻原はロシアから電波が流された教団のラジオ番組で以下のようなスピーチを流した。「いよいよ君たちが目覚め、そして私の手伝いをするときがきた。…私は君たちが私の手となり足となり、あるいは頭となり、救済計画の手伝いをしてくれるのを待っている。さあ一緒に救済計画を行なおう。そして、悔いのない死を迎えようではないか」。<sup>49</sup> 彼のスピーチがかなりあいまいであったため、アメリカの人民寺院などの他の終末論的新宗教教団の例からみて、オウム信者が集団自殺をするのではないかという憶測が流れたが、それには根拠がないことがわかった。他方で、われわれは、麻原のスピーチとは日本社会に対する宣戦布告であると解釈することができよう。なぜなら、ヴァジュラヤーナの観点からするとサリン攻撃は救済行為以外の何ものでもないからである。つまり、オウム真理教の観点からする真理にもとる者を殺害して日本という国家を転覆しオウム真理教の王国を建設することこそ、救済計画に他ならないのである。

したがって、地下鉄サリン事件は一連の事件の終わりとはならなかった。3月30日には國松孝次警視庁長官が正体不明の人物から狙撃され重傷を負った。この事件がオウム真理教と関連があるのではないかという憶測が流れたが、それを裏付ける証拠は挙がらなかった。

4月19日には国会がサリンを禁止する法

案を可決した。同日、横浜駅で500名の人々が異臭を放つガスを吸って病院に収容された。その事件はオウム真理教との関連が後日否定されたが、人々の恐怖や不安をかき立てたことは確かであった。

4月23日、マンジュシュリー・ミトラこと村井秀夫オウム真理教科学技術省大臣が多数のテレビカメラの面前で刺殺された。犯人は在日韓国人の自称右翼の青年であった。村井は教団の研究開発や神経ガスや他の武器の生産、麻薬の生産と取引などについてあまりにも知りすぎていたので、麻原によって処刑されたのではないかという憶測が流れた。つまり、村井の死はオウム真理教の利益と合致していたというわけである。

翌年の1996年4月27日に開廷された井上嘉浩(元オウム真理教諜報省大臣)の第一回公判の検察側冒頭陳述によれば、麻原彰晃こと松本智津夫は村井が暗殺された日に、政府を転覆して彼の逮捕を阻止するために石油化学コンビナートを爆破したり参議院議員に郵便爆弾を送りつけたりする無差別テロを行なうように弟子たちに命令した。<sup>50</sup> それだけではなく、自衛隊員の信者を動員することによって自衛隊を扇動してクーデターを起こしたり、マスコミ関連の場所にダイオキシンなどの毒物を散布したりすることを命じたとされている。<sup>51</sup>

5月にはいると、東京の地下鉄の駅に毒ガスを発散させる試みが2回なされたが、いずれも失敗に終わった。このことによってテロリストの標的が政府機関そのものではなく、一般市民の虐殺であることが明確になった。

5月16日の家宅捜索において麻原が上九一色村のオウム施設の一つに隠れているのが見つかり逮捕された。同日、新たに選挙で選ばれた青島幸男東京都知事のもとに郵便爆

弾が送りつけられ、秘書がそれを開封した際に爆発し秘書が被害にあった。

最近までモールや地下道や列車や劇場などの東京地方の各所で刺激臭のあるガスが発散された事件が多発している。日本にはもはや平和で安全な「日常生活」が戻ってこないのだという諦めの雰囲気は充満している。サリン事件はまさしく 20 世紀の終焉を告げる先触れとなった。

### オウム真理教の救済観

東京の地下鉄がサリンによる攻撃を受けてからオウム真理教信者がさまざまな罪状で逮捕された。興味深いことに、自らの無実を訴えた者はほとんど存在しなかった。反対に、多くのオウムの幹部が自分たちの罪を認めて自分たちの行為に深い後悔の念を示している。これらの人々は誠実で正直であることがわかり、首謀者麻原彰晃の被害者であることが判明したのである。

林郁夫は東京の地下鉄にサリンの袋を置いてガスを発散させたオウム信者の一人であった。彼は医者であり、オウム真理教附属病院の院長であった。1995 年 12 月 26 日に開廷された公判において林は深い自責の念をあらわにして自分の知るかぎりすべて話すことを誓った。病人を癒すことを誓った者が一般市民の大量殺戮に関与したというのはまさしく皮肉としか言いようがない。常識からすれば、医師がなぜそのような恐ろしいことをすることができたのか、また、人間の生命を救うという医の倫理がどこに行ってしまったのか、と問わざるを得ない。

麻原は、究極の悟りと解脱を達成したと主張した。彼はシヴァ神の使者であり化身であった。「真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師」とい

う彼のタイトルが示すとおり、彼よりもこの世で崇高な人物はいないというのが教団の見解であった。彼は至高の真理を担った「生き神」であったのである。彼の絶対の知恵や真理や正義に疑問を呈する権威は存在しなかった。その結果はグル崇拜であり、オウム真理教の絶対主義的な組織に置いてもっとも重要な要因であった。麻原は「オウム神聖皇国」において司法立法行政の三権を一手に握り独占していたのである。

麻原はこのようにして自らが絶対の真理と救済の根源であるというポーズを取っていた。このことは同時に、麻原彰晃とオウム真理教によらなければ人々は救済されようがないということの意味している。つまり、オウム信者のみが救済される可能性があり、他のすべての人々は地獄餓鬼畜生のいずれかの世界に生まれ変わる定めにあることになるのである。

われわれがこれらの仮説を受け入れるとするならば、どのような結論が得られるであろうか。麻原彰晃尊師はオウム信者以外のこれらの度しがたい人々に対しても聖なる慈悲をもって救済しようという意欲があったことになる。そして、彼らを救済するためには彼らを殺害して彼らの悪いカルマを背負わなかったのである。この行為はポアと呼ばれた。彼はこれらの悪い魂を変容させて高次の領域に送り届ける力をもっていた。彼は法廷で、自らが四無量心つまり四つの計り知れない利他の心に基づいて行動したと主張している。それらはつまり慈悲喜捨の四つである。<sup>52</sup>仏教用語としては、慈 *maitri* とは衆生に樂を与えることであり、悲 *karuṇā* とは衆生から苦を抜くことであり、喜 *muditā* とは他者の樂をねたまないこと、捨 *upekṣā* とは好き嫌いによって差別しないことを意味する。いずれにせよ、ここには明ら

かに後悔の念はみられない。

麻原は日本全体を救済するためには現政権を倒してオウム真理教の独裁を打ち立てる他なかった。だからこそ、彼は生物化学兵器や機関銃のような兵器を準備しなければならなかったのである。オウム真理教はこれらの爆弾をまき散らすためのヘリコプターさえ購入している。こうして、それは勝利を追求する手段としてハルマゲドンをもたらそうとした。したがって、麻原の「予言」は弟子たちによって実現されなければならない計画以外の何ものでもなかったのである。そして、彼は、殺人や地下鉄でのサリンガスの発散のようなことを伴うとしても、弟子たちにとって麻原の命令に従うことが修行であり徳を積む手段であると主張した。

これらの推論から結論されることは、麻原が最終解脱をして至高の真理を持っていて、彼の干渉なくしては誰も救済されないという信仰にこのような悲劇の原因があるということである。これらの信仰が殺人を救済行為として正当化し、また、麻原の利己的な命令は愛や慈悲の行為であると解釈されたのである。

しかしながら、人間が殺人を正当化してそれを徳を積む手段として賞賛することができたのであろうか。麻原の弟子たちはなぜ彼の権威に疑問を抱かなかったのだろうか。これらの問いはいまだに答えられないままになっている。

## 結 論——タントラ・ヴァジュラヤーナ という呪い

1995年10月30日に東京地方裁判所はオウム真理教の宗教法人解散を命じる決定を下した。この決定の理由は、(1) 麻原がオウム真理教のすべての教えと活動の首謀者であること、(2) 麻原がヴァジュラヤーナという、目

的が手段を肯定する教えを採用したこと、(3) オウム真理教がサリンという神経ガスを生産するプラントを建設したこと、(4) このことが明らかに公共の福祉に反すること、の4点であった。<sup>53</sup> 1996年1月31日、最高裁判所はオウム真理教に対する解散命令を承認した。

さらに、1995年12月14日には日本政府が破壊活動防止法をオウム真理教に適用する方針を決定した。<sup>54</sup> これは反政府組織に対する究極の法律であり、今まで一部個人に適用されたことはあるとはいうものの、いかなる団体に対しても適用されたことはなかった。その法案が通過する過程においても強い反対が出されたが、その理由はそれが戦前の悪名高い治安維持法を思い起こさせることであった。当時、とりわけ社会党と共産党が法案通過に強く反対した。今回、社会党出身の村山富市首相がこの法律の適用の決断を下すことになったのは歴史の皮肉としか言いようがないだろう。

破壊活動防止法は、暴力主義的破壊活動や殺人の危険が将来にわたって予測されるときにそれを妨げるために適用される法律である。オウム真理教は、宗教法人として解散されたとしてもそれは宗教法人に対する免税措置という特権を奪われるだけの話であって、革命組織としての活動を続けることに何ら支障はない。結局のところ、解散させたとしても破壊活動や政府転覆活動を防ぐには十分でないことになる。

すでにみたように、オウム真理教は目的によって殺人を含めていかなる手段をも正当化する教えを持っている。それは麻原による独裁を実現しようとしたのである。サリンガスの発散は、このような政治的イデオロギーの追求の手段であり、日本の法制度に対する挑戦であ

ると解釈されうる。

麻原は逮捕されたというものの、オウム信者は明らかにこの種の政治的イデオロギーにいまだに固執している。犯罪容疑者となっている数名の信者がいまだに逃走しているが、おそらくはオウムの在家信者の助けを得て逃走している可能性がかなり高いであろう。武装に関していえば、オウム真理教はサリンガスを生産し、70トンのサリンを生産する能力のあるプラントを建設し、サリンを生産するのに必要な資材を調達し、サリンその他の爆弾を発散するのにヘリコプターを購入し、機関銃の制作を開始し、さらに、自衛隊員を多数勧誘していた。そして、オウム信者は警察の一斉捜査以降も日本社会において無差別テロを繰り返したのである。これらの理由をすべて勘案すれば、オウム真理教が団体として存続するのを認めることは極めて危険なのである。

以上が、公安調査庁の「オウム真理教に対する破壊活動防止法の適用について」という文書の概略であった。<sup>55</sup>

もし、われわれが麻原のタントラ・ヴァジュラヤーナの教えの本当の内容と彼がなしたことの事態を考慮するならば、オウム真理教に破壊活動防止法を適用する政府の決定に反対することはなかなか困難である。なぜなら、信教の自由や宗教的多様性を護ることは根本的に正しいとはいえ、異様な宗教集団を保護することによってわれわれ自身の生命を危険にさらすことはできないからである。その宗教の趣旨が市民社会と敵対するのであれば、その信者は市民社会以外に活路を見出すほかないのではなかろうか。とはいえ、この法律の適用とそれがもたらす諸問題についてはさらに深く考えてみる必要があるだろう。<sup>56</sup>

オウム真理教が引き起こした事件の数々を

振り返ってみるとき、それらは決して目覚めることのない悪夢のようである。昨年3月にサリンが地下鉄で発散されて以来、東京地方ではいまだに刺激臭による被害が後を絶っていない。いったいだれがこのようなテロを繰り返しているのかは現段階では明らかになっていないが、麻原とタントラ・ヴァジュラヤーナの呪いがわれわれにかかっているかのようである。

オウム真理教によって行なわれた教義の植え付けはきわめて強烈であり、多くの信者がイニシエーションの際にLSD、覚醒剤、メスカリンなどの麻薬を服用されただけではなく、厳しい修行によって脳内麻薬物質である禁断のエンドルフィンの快感を覚えてしまったと推測されるほどであった。このような人々にとってこの種の絶頂体験から遮断することはきわめて困難であり、また、彼らが長年にわたってその腐敗と誤った情報の点で呪い続けてきた社会に再適応することもまた非常に困難である。

麻原とオウム信者の心理的な特徴付けはまだはじまったばかりであり、この点の努力をさらに続ける必要がある。

われわれにはオウム真理教が疑似宗教であるか否かについて判断を示すことはできない。これは確かに宗教学者の課題ではないからである。同時に、オウム真理教を宗教学の枠内にもみ位置づけることはかなり困難である。なぜなら、政治、革命、信者の心理的操作などの他の多くの要因を伴っているからである。われわれは「カルト」や「破壊的カルト」というジャーナリスティックな用語を採用する強い誘惑を否定できないが、他方、多くの宗教学者がそれらの用語の採用を忌避していることも確かである。<sup>57</sup> また、オウム真理教事件はわれわれに宗教集団における心理的操作について反省する機会を与えてくれている。

当初、マスコミにオウム真理教に関する情報が洪水のように溢れかえっていたが、それは警察のリーク情報や元信者の告白や噂に基づくものであった。しかしながら、昨年の秋から多少状況が変わり、オウム信者に対する検察側の冒頭陳述や裁判所による判決が入手できるようになってきた。われわれは事態を法的な観点から扱えるようになってきたのである。

オウム真理教に関する真剣な学問的な研究や組織的な研究はまだまだ端緒に付いたばかりである。オウム真理教の活動やその全体像について把握することが困難なことはだれしも否定しないだろう。ヘーゲルが指摘しているように、ミネルバのフクロウは夕闇が迫ったときに飛び立つのである。

## 註

1. 『朝日新聞』国際衛星版 13 版、1996 年 4 月 20 日。
2. 「読売新聞オンライン」<http://www.yomiuri.co.jp/ohm/9604251.html>
3. 『Vajrayana Sacca』12 号、1995 年、18 ページ。
4. 〈霊術〉系新宗教の概念規定に関しては、大村英昭・西山茂編『現代人の宗教』有斐閣、1988 年、169 ページ以下参照。島菌進『オウム真理教の軌跡』岩波書店、1995 年、5 ページ参照。
5. 「特集オウム裁判」「オウム解剖——グルと呼ばれた男——自作自演(主役)の少年時代」、<http://ii/asahi.com/paper/aum/guru4.html>。
6. 麻原彰晃『超能力 秘密の開発法』大和出版、1986 年、35 ページ。島菌、8 ページ。
7. 同書、26 ページ。
8. 『マハーヤーナ』1 号、株式会社オウム、1987 年、12-23、24-32 ページ参照。
9. 『トワイライトゾーン』1985 年、10 月。
10. 麻原彰晃『超能力 秘密の開発法』大和出

版、1986 年。同著『生死を超える』(株)オウム、1986 年。同著『超能力 秘密のカリキュラム』(株)オウム、1987 年。

11. 麻原『超能力 秘密の開発法』、167 ページ以降。
12. 『マハーヤーナ』1 号、(株)オウム、1987 年、12 ページ以降。
13. 麻原彰晃『ヴァジュラヤーナコース 教学システム教本』オウム真理教、出版日不明。出版の時期は不明であるが、本書に収められている最後の講義が行なわれた 1994 年 4 月 30 日以降に編集されたことは容易に推測が付く。
14. 「読売新聞オンライン」、<http://www.yomiuri.co.jp/ohm/9604251.html>。
15. 中沢新一、ラマ・ケツン・サンポ共著『虹の階梯』(初版 1981 年)、中央公論社、1993 年、553 ページ以降。われわれは本書がオウム真理教の教理の形成において強い影響を与えたことを否定できない。
16. 『チベットの死者の書』川崎信定訳、筑摩書房、1991 年。
17. 麻原『イニシエーション』(株)オウム、1987 年。
18. 同書、68 ページ以下。
19. 同書、106 ページ以下。
20. 麻原『マハーヤーナ・スートラ』(株)オウム、1988 年。
21. 同書、144 ページ。
22. 『マハーヤーナ』13 号、1988 年、47-48 ページ。
23. 同誌、48 ページ。
24. この件に関しては以下の著作を参照のこと。江川紹子『救世主の野望』教育資料出版会、1991 年。熊本日新新聞社編『オウム真理教とムラの論理』(初版 1992 年)朝日新聞社、1995 年。
25. 麻原『滅亡の日』(株)オウム、1989 年。
26. いずれも(株)オウム刊。
27. 1996 年 4 月 17 日に東京地方裁判所で行なわれた、オウム真理教元信者、岡崎一明に対する公判の検察側冒頭陳述参照。

28. 『ヴァジュラヤーナコース 教学システム教本』参照。本書は講義録となっていて、第一話が1988年8月5日付、最後の第56話が1994年4月30日付となっている。

29. 同書、31-32 ページ。

30. 同書、35 ページ。

31. 同書、45 ページ。

32. 同書、83-84 ページ。

33. 江川、182 ページ。Cf. Helen Hardacre, *Aum Shinrikyo and the Japanese Media: The Pied Piper Meets the Lamb of God*, Institute Reports of East Asian Institute (New York: Columbia University, 1995), 11.

34. 野田峰雄「麻原オウム、殺害者はなんと 79 人」『週刊ポスト』1996年3月22日、226-229 ページ。

35. 同上。

36. 江川、209 ページ。

37. 「極智新聞」5号、1990年3月刊(フォーラム「毎日新聞オウム裁判情報」(AUMCASE, niftyserve.or.jp)の引用による)。

38. 江川紹子『オウム真理教追跡 2200 日』文芸春秋、1995年、162-171 ページ。

39. 『ヴァジュラヤーナコース 教学システム教本』、117 ページ。

40. 同書、58-59 ページ。

41. 熊本日日新聞社編『オウム真理教とムラの論理』、243 ページ参照。

42. 井上嘉浩「被告人陳述」、1996年3月21日。フォーラム「毎日新聞オウム裁判情報」(AUMCASE), niftyserve.or.jp. 参照。

43. ヴァジュラヤーナコース 教学システム教本』、154 ページ。この指摘内容は虚偽であったことが現在わかっている。

44. フォーラム「毎日新聞オウム裁判情報」(AUMCASE, niftyserve.or.jp)による。

45. この裁判は1996年6月21日までに原告(元地主)と被告(オウム真理教)の間で元信者名義の土地を原告に返還するという和解が成立し、24日に長野地方裁判所で正式に和解に達した。ただし、

この和解はあくまでオウム真理教の破産管財人によるものである。

46. フォーラム「毎日新聞オウム裁判情報」(AUMCASE, niftyserve.or.jp)による。

47. これらは裁判上採用された数字で当初報道された数字とは異なる。

48. 「読売新聞オンライン」、<http://www.yomiuri.co.jp/ohm/9604255.html>。

49. フォーラム「毎日新聞オウム裁判情報」(AUMCASE, niftyserve.or.jp)による。

50. 「井上嘉浩被告公判、検察側冒頭陳述」『朝日新聞』国際衛星版13版、1996年4月27日。

51. 同上。

52. しかしながら、麻原自身のこれらの概念に対する理解はかなり異なっている。彼によればそれらは以下のようなものであった。「私は、逮捕される前から、そして逮捕された後も、一つの心の状態で生きてきました。それは、すべての魂に、絶対の真理によってのみ得ることのできる絶対の自由、絶対の幸福、絶対の歓喜を得ていただきたい、そのお手伝いをしたいと思う心の働き、そして、その言葉の働きかけと行動、つまりマイトリー、聖慈愛の実践。絶対の真理を知らない魂から生じる不自由、不幸、苦しみに対して、大きな悲しみを持ち、哀れみの心によって、それを絶対の真理により取り払ってあげようとする言葉と行動、つまりカルナ、聖哀れみの実践。絶対の真理を実践している人たちに生じる絶対の自由、絶対の幸福、絶対の歓喜に対して、それをもに喜び賞賛する心、そしてその言葉の働きかけと行動、つまりリター、聖賞賛の実践。そして、今の私の心境ですが、これら三つの実践によって、私の身の上に生じる如何なる不自由、不幸、苦しみに対して、一切頓着しない心、つまりウペクシャー、聖無頓着の意識」。

53. 『朝日新聞』国際衛星版13版、1995年10月31日。

54. 『朝日新聞』国際衛星版13版、1995年12月15日。

55. 「オウム真理教に対する破壊活動防止法の適用について」(全文)、『朝日新聞』国際衛星版13



版、1995年12月15日。

56. 滝本太郎、福島瑞徳『破防法とオウム真理教』岩波書店、1996年。本書は破防法適用反対の立場から破防法が実際に適用された場合の諸問題を的確に描いている。

57. Cf. Steven Hassan, *Combatting Cult Mind Control* (Vermont: Park Street Press, 1988). Cf. Anson Shupe & David G. Bromley, *Anti-Cult*

*Movements in Cross-Cultural Perspective* (New York: Garland Publishing, Inc., 1994).

わたなべ・まなぶ

本学文学部助教授・本研究所第一種研究所員  
現在、ハーバード大学世界宗教研究センターに  
おいて上級研究員として在外研究中